慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	蒙古資源經濟論(楊井克巳著, 三笠書房刊)
Sub Title	
Author	杉本, 忠(Sugimoto, Tadashi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1941
Jtitle	史学 Vol.20, No.2 (1941. 11) ,p.145(331)- 146(332)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19411100-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アメリカ史總說（恒松安夫著　三笠書房刊）

敵としても味方としても、我々が知らなければならない米國についての邦文史書は甚だ乏しい。ヘボン講座から生れた數册の書物と木村重治氏譯ハワースの米國近世史（泰西名著歴史叢書）及び高木八尺氏の米國史序說が、これまで信頼し得る我等の知識の糧たるに過ぎなかつた。幸にして最近藤原守胤氏の尨大なるアメリカ建國史論上下二卷の刊行を見、多年の研究に基く該博なる知識の倉庫を得て學界に裨益するところが大であつたが、これは初學者の近づき得るものではなく、又米國史の一部分を憲法史的に取扱つたものである。しかるに、近頃岩波新書の中に、ファランドのアメリカ發展史（上下二卷）が名原廣三郎、高木八尺兩氏の邦譯を見た上に、今回、我が恒松安夫君によつて、三笠書房の現代學藝叢書中の一卷として、アメリカ史總說の刊行を見たのである。

本書はアメリカの新大陸全般に亙る探檢と發見から筆を進めて、北米合衆國の歴史を世界大戰後の今日に至るまで、概說的に要領よく、平易に、記述したものであつて、米國史の全般を入門的に知るのには、極めて便利である。一般讀者、殊に學生諸君に國民の常識として本書の一讀を勸め得ることは、私の幸とするところである。定價一圓。（間崎万里）

蒙古資源經濟論（楊井克巳著　三笠書房刊）

本書は現代學藝叢書中の一册で、現在蒙疆と呼ばれてゐる地域に關する經濟概說書である。從てその對象たる地域は北はゴビの沙漠、南は萬里の長城によつて劃された通常内蒙古と稱せられる地域から、滿洲國に屬する東部内蒙と、寧夏省以西の西部内蒙を除いた部分で、嘗ては察哈爾省・綏遠省・山西省北部（内長城線以北）を形成してゐた地域であるが、現在では蒙古聯合自治政府の支配下にあり、即ち張家口・厚和・包頭の三特別市と察南地區（十縣）・晉北地區（十二縣）・察哈爾盟（八縣八旗）・錫林郭盟（十旗）・巴彦搭拉盟（十一縣五旗）・烏蘭察布盟（六旗）・伊克昭盟（四縣七旗）に屬する地域である。實はこれだけの事にすらなか〳〵無關心の人が多く、大同は華北に屬すると思つてゐる邦人も少くないから、さういう點からも本書は蒙疆に關する概念を得るに手頃な入門書としての價値を持つわけである。しかも境域・面積・人口に初まり、世界經濟に於ける蒙古の位置、蒙疆經濟の構造的特徴、農業、牧畜業、鑛業、工業、交通、商業、貿易、貨幣及び金融、財政、蒙疆經濟の新動向と章を追つてそれ〴〵手際よく纏められてゐる。

陰山山脈によつて分たれた南部の黄土地帶は概ね漢人の農耕地帶であり、北部の砂礫草原地帶は蒙人の遊牧地帶であるが、蒙人は僅に全人口の五％に過ぎないこと。此地が事變前までは主として獸毛獸皮（殊に羊毛）の原料供給市場であり、カーペット用經

糸として意外にも米國に最も多量輸出されてゐたが、事變後は日滿支ブロックの一環として、その羊毛資源が我國に確保されたばかりでなく、支那では一番多くの埋藏量を有する鐵と、滿洲の二—四倍に達する夥しい埋藏量を持つ石炭の供給地として開發の緒につき初めてゐること等々、今日常識として誰しも心得ておくべき事柄或は蒙疆における中央財政上の問題として指摘さるべき、歳入補塡の爲の借入金問題、阿片收入に依存する不健全性、人件費過多、蒙古王公私有土地の問題、鹽の專賣等に見られる財政政策確立と蒙人自然經濟との矛盾と云つた事項なども取上げられてゐるし、輸出統制と低物價政策が隣接せる華北の物價高により相當深刻な影響を受け、若干の困難若しくは矛盾を示しつゝあると云ふ、今日の蒙疆が當面せる最も重要な問題も明確に指摘されてゐる。

要するに本書は、著者も自ら述べられた如く、その資料に於て多少物足りぬ點もないではないが、僅々三百頁に滿たぬ紙面の中によく今日蒙疆經濟全般を平明に敍述せられた點、廣く一般に推奬するに吝でない。（定價一圓）（杉本忠）

神典と日本精神（橋本增吉著　平凡社刊）

本書は項を分つこと六、序言、神典と日本精神、日本書紀と支那思想、日本上代思想と世界觀、結言、その中「神典と日本精神」は書中最も主要な部分であるから、これを取つてこの書名とした、とのことであるが、この一篇は昭和十四年六月十日國史同顧會第九十九回講演會に於て、「記紀に現はれたる日本精神」なる題名の下になされた講演の速記を、國史同顧會紀要第四十三號に掲載したものに基くところであり、その他の諸篇はその補遺增註の意味で論述したものである。

以下簡單にその內容を紹介したいと思ふ。

八紘一宇の精神が日本精神の根柢をなすものであり、肇國以來日本民族の指導原理であることは、今日我が一億國民の搖ぎなき信念であるが、これを以て寧ろ、肇國以來今日に至る歷史の發展の過程に於て、我が國民の間に生長し來つた思想精神として認むべきものである、との見解を有するものもあるが、これは「八紘一宇」なる語が書紀にのみ記されてをり、古事記には全く見えてゐないことに基くのであり、ために古事記を以て後世の僞書としてこれを抹殺せんとする向もないではないが、古事記が斯る性質のものでないことは、その記事の內容からして疑ふべからざる事實であり、特に日本精神の根柢をなす八紘一宇の思想精神は、その一貫せる神典の物語の中に、これを確認すべき記事として現はされてゐるのである。否寧ろ八紘一宇の日本精神を根柢とし基礎として神典の物語そのものが成立し組織されてゐると稱すべきものである。

「元來、國家なるものは、有機的組織としてその創業成立の當初から、その性格種類を異にするものであり、その創業の精神性格を根柢とし、基礎として、所謂國家的の活動發展を遂行することが、卽ちその國家の歷史と稱せられるものである。

建國の精神が、國家の創建後に、その歷史的發展と共に、それ